

AKITA Biz Forest

あきたBizフォレスト TOPインタビュー

TOP INTERVIEW

大森山動物園
園長 小松 守氏

1952年秋田市生まれ。秋田高校、帯広畜産大学獣医学科を卒業し、75年に秋田市役所入所し動物園勤務始まる。98年からは動物園長。退職後も嘱託園長で現在に至る。環境省のイヌワシなど希少種保存対応の委員。2014年から岩手大学などで動物園学講義の非常勤講師。23年にコラム集「時には動物から」刊行。



秋田にある自然の強み。そのポテンシャルを活かしたら……

工藤 この度は大森山動物園50周年おめでとうございます。

小松 こちらこそ。ニューリーダーズネットワーク (<http://sakuraippai.com/>) さんには毎年いつも桜の植樹をしていただきありがとうございます。もう10年以上ですね。

工藤 いえいえ。むしろ小松園長のおかげです。あらためて本日はよろしく願いたします。早速ですが小松園長の幼少期の頃の生い立ちやご経歴などをお聞かせ下さい。

小松 秋田市生まれです。動物と特に関わりのある家庭で育ったわけではありませんでした。子供の頃は草野球の三角ベースをしたり、虫を採ったりと、外で遊ぶのが好きでした。

工藤 え？ ご両親が何か動物などに関わるお仕事をしていただけではないのですか？

小松 そうですね。父は国鉄の職員でした。生き物との関わりは、家には家族のように猫がいたし、小さい頃飼っていた愛犬のラッキーが、殺鼠剤を食べてしまったのか、血を吐き苦しみながら死んだ場面を体験し、とても悲しかったことを今でも鮮明に覚えています。また自宅で鶏を飼っていて、正月前には父がその鶏をしめ、血抜きをしていたのも覚えています。もちろん家族が食べるためです。ある時、その鶏の大半が野犬に襲われて殺されてしまった事もありました。小さいころから動物の生死含め様々な体験しながら、子どもながらに色々感じていたのかもしれないですね。

工藤 なるほど。それぞれ子供心と与えるインパクトは大きそうな出来事ですね。学生時代はいかがでしたでしょうか？

小松 高校では地学部天文班に所属、学校に寝泊まりして望遠鏡で星を覗いていました。中学校の修学旅行が一つのきっかけだったのかもしれませんが、北海道に強く引かれていたのか大学受験は北海道にある大学を探しました。その一つが、帯広畜産大学でした。大学紹介にあったキャッチコピー「北海道農業のバイオニアとしての大学」が目に入り飛び込んできました。「カッコいい」と思ったのが選択の決め手でした。最初は農業工学科を志望と考えていた時、高校の友人が帯広畜産大学を受けるなら獣医学科にしたらという勧めで受験し、合格したのが獣医師の道の始まりでした。臨床の勉強はあまり好きではなく、細菌など微生物に興味があり、いろんな本を買って集め勉強、顕微鏡で細菌を覗くのが好きでしたね。望遠鏡で星を覗くのはどこか似ていたのかもしれないですね。大学4年の5月の連休、学生寮で飲み明かした早朝、既卒で馬の診療所勤務の寮の先輩が明け方に大学構内で野鳥観察に連れて行ってくれました。朝焼けの白樺林の中、双眼鏡で見たトラツグミのキラキラ光る眼、興奮と感動で眠気も吹き飛んでしまうような衝撃的な時間と経験でした。

工藤 私は野鳥観察の経験が無いので想像でしかわかりませんが、話している小松園長

の目がひときわキラキラしているのはわかります。卒業後はいかがでしたでしょうか？

小松 なぜか真面目に就職活動をしないまままでいました。1975年の大学4年(当時は獣医の大学は4年制でした)の卒業時の3月、そこで大森山動物園での獣医師の急募がかかりました。動物園が開園して1年半が経っていましたが、私は当時動物園に特に興味がなかったようで、新しく動物園ができたことも知りませんでした。勤めていた獣医師が突然辞め不在になっていた情報を親から知らされ、親の勧めもあり面接試験を受け、何かに導かれるようにととん拍子で動物園への就職が決まりました。今思えば不思議な感じです。

工藤 色々なご縁や偶然が重なったようにも見えますが必然だったのかもしれないですね。それから獣医師として動物園に勤めてきたのですか。実際どうでしたか？

小松 特にはじめはとても大変でした。苦笑。採用早々にヒョウの難産への対応が迫られました。当時の獣医師は私だけ。無論、現場知識や経験はゼロ。残念ながらその命を助けることは出来ませんでした。とてもショックを受けました。もっと実務的な勉強をしなければダメだと思い、すぐに市内の開業動物病院の先生に弟子にしてほしいと頼み込み、通常の夕方までの動物園勤務が終わってから、動物病院に通って実習を重ね、また休みの日は猛勉強しました。獣医の

あきたBIZフォレストTOPインタビューは、秋田の起業家と企業環境を応援することを宣言いただいた100名以上の経営者の皆様を中心に、起業家に役立つ話題と起業家へのメッセージを対談形式でまとめたものです。

臨床専門書を読む毎日、コピーなどない時代、要点を書き写しなど。今の人はそんなことはしませんね。また当時の動物園には医療設備は無いに等しいもの、診療所をDIYで自作したり、古くなった医療器具を譲り受けたりして徐々に環境整備に取り組みました。今思えば大変でしたが、充実した毎日でもありました。現場での獣医師約23年後、1998年から園長に就任し、もうすぐ大森山動物園勤務49年になります。

工藤 想像以上に色々あったのですか。ところで、小松園長の話す生物の話は、どこかビジネスの根底にも繋がる話も多いといつも勝手に感じています。会社も生き物だと言われたりもしますが、今の秋田の社会環境で思うことはございますか？

小松 全国でもそうですが、特に秋田はクマ出没が様々な社会問題になっています。この現象は人口減、高齢化、地域の衰退など基礎的要因にあり、地方での人の力の衰退を象徴してもあります。クマが人の生活圏を

侵食してきているようなものですね。

工藤 なるほど。熊は人命にも影響したので特に話題になりましたが、全国各地ではインシヤやその他の動物が農作物に被害をもたらしていますね。興味深いです。では秋田において経済的なポテンシャルを感じることはございますか？

小松 私は経済的なコメントはできませんが、動物や自然と向き合ってきた者として生態学的な見方であれば、生き物のポテンシャルの基礎は土地の広さです。特に有効活用できる場、秋田は日本で6番目に面積の広い県で、大きな川が3本流れ、平地も多い、この広さを改めて強みにどう活かしているか。農業や林業などを改めどう発展させるかは大きな鍵だと思います。もうひとつは風です。長い海岸線を持ち、陸の広い秋田は風力発電には良質な風が生じる立地にもあります。風のエネルギーも秋田の強みだと思います。土地や風、二つの強みは自然が持つ力であり、これらの強みを若い人たちの

アイデアや知恵、デザインを活用し、ビジネスに繋がれば……なんて思います。動物のサイズは土地の広さと水、土地はエネルギー(植物などの資源エネルギー量)、水は生命の源、それがたっぷりある秋田、それを新し時代にどう活かすか、ですかね。

工藤 どちらも「自然」ですね。小松園長らしいお話ありがとうございます。

動物をみる感性は万国共通

小松園長の趣味は旅をすることだそうです。国内旅行では温泉に浸かりお酒を飲み、海外旅行では現地の方々の生活の様子を見るのが好きなのだそうです。ちなみに世界各地の動物園に行き、ひとつ分かったことは、動物園で動物をみることについては国が違っても世界中みんな同じ感性で楽しんでいるということ。と嬉しそうに話してくれました。

本日は貴重なお時間とお話しを本当に有難う御財増した。

インタビュー

合同会社ジェグルス(共同事業体ジェイワン) アントレプレナーコンシェルジュ 工藤 実

ライター J-MOTHERS 長内 ゆかり

企画 共同事業体ジェイワン(秋田市ビジネススタートアップ支援事業)

